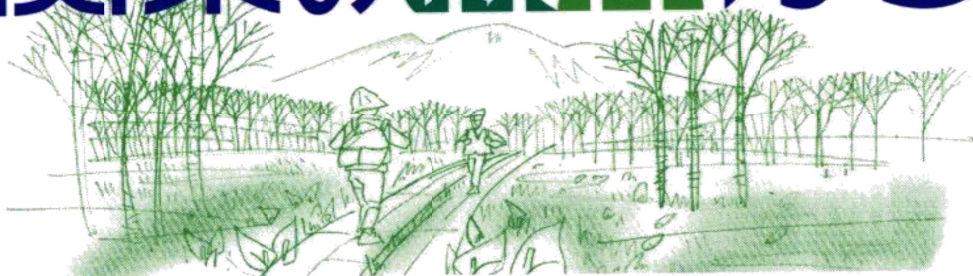


平成27年1月1日

第130号

関東の森林から



国民の森林・国有林

関東森林管理局

前橋市岩神町4-16-25

TEL.027-210-1158

<http://www.rinyamaff.go.jp/kanto/>

謹
賀
新
年

富士の朝日（静岡県伊豆市達磨山より）

（撮影：伊豆森林管理署 澤井良一）

年頭のご挨拶

関東森林管理局長 志田 孝一

コンテナ苗を活用した「架線系一貫作業システム実証試験」

現地検討会を開催

天竜森林管理署

低コスト作業システム推進のための列状間伐現地検討会を開催

森林整備部 資源活用課

年頭のご挨拶

関東森林管理局長 志田孝一



新年を迎え、謹んで年頭のご挨拶を申しあげます。

昨年を振り返りますと、御嶽山の噴火や長野県における震度六弱の地震発生、広島県における過去に類を見ない異常豪雨による甚大な山地災害の発生など、自然災害の脅威を改めて思い知らされた一年でありました。

関東地方におきましても、関東森林管理局が所在する前橋市において観測史上最高となる七三センチの積雪を観測するなど記録的な大雪により市民生活に多大な影響をもたらしたほか、栃木県を中心に、雪の重みにより倒木・折損木が発生するなど林業・木材産業にも大きな被害が生じました。

被災された方々及び関係者の皆様に心よりお見舞い申し上げますとともに、関東森林管理局として、治山事業及び森林整備事業の計画的な推進により安全な国土づくり・緑の国土強靱化に取り組んでいく決意を新たにしているところです。

さて、森林・林業・木材産業をめぐる情勢に目を向けますと、人工林の多くが本格的な利用期を迎えており、林業の成長産業化を実現させることが喫緊の課題となっております。このため、林野庁におきましては、

新たな木材需要の創出に向け、中高層建築等での利用が期待されるCLT（直交集成板）など、新たな製品・技術の開発・普及に取り組みとともに、公共建築物等への地域材利用の促進、需用者ニーズに的確に対応した国産材の安定供給体制の構築を進めるほか、シカの食害等、野生鳥獣被害への効果的・効率的な対策の推進等を図っていくこととしております。

関東森林管理局におきましても、国産材の安定供給に向けシステム販売の効果的な活用を進めるとともに、森林吸収源対策として、これまでの間伐に加え、主伐・再造林による森林の若返りに積極的に取り組むこととしております。

また、本年は、国有林野事業が特別会計から一般会計に移行して三年目を迎えますが、昨年十月に群馬森林管理署において初めて民有林との間で締結した林産物安定供給システム協定の普及を図るとともに、森林共同施業団地の設定等を通じた施業集約化や伐採・造林の一貫作業システムやコンテナ苗を活用した低コスト造林などの新たな技術の導入を通じて、国民の森林、地域の国有林として、森林・林業全体の再生に貢献して参りたいと考えております。

さらに、本年三月には東日本大震災の発生から四年を迎えますが、東京電力福島第一原子力発電所の事故に伴う避難指示の一部が解除されるなど被災地の復興に向けた歩みが見られるものの、林業・木材産業に深刻な影響が今なお続いております。

関東森林管理局といたしましても、関係自治体等と連携し、ふくしま森林再生事業をはじめ、国有林の除染や被災した海岸防災林の整備などを通じて、被災地の復旧・復興に全力を尽くしてまいります。

多岐にわたる役割を担っている国有林を、今後とも国民共通の財産として適切に管理し、国民の皆様からの負託に応えられるよう、関係自治体、関係者等と連携を密にさせていただきますながら、着実に取組を進展させて参りますので、より一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

本年が、林業・木材産業にとって、成長産業化に向けた飛躍の年となりますとともに、皆様の益々のご健勝とご多幸を祈念申し上げます。年頭のご挨拶とさせていただきます。

コンテナ苗を活用した 「架線系一貫作業システム実証試験」現地検討会を開催

天竜森林管理署

【背景】

森林・林業の再生及び持続的な森林経営の推進を図るためには、作業コストの削減による採算性の向上が不可欠となっています。

関東森林管理局においては、平成25年度から低コスト造林技術の開発を目的として、コンテナ苗を活用し、丸太の生産から造林作業までを一体的に行う一貫作業システムの実証試験を茨城森林管理署管内において実施しています。

しかし、急傾斜地での一貫作業システムによる取組は進んでいないことから、平成26年10月28日、天竜森



タワーヤード、自走式搬器による搬出

林管理署管内において、架線系高性能林業機械を用いた「一貫作業システム」による実証試験を、全国に先駆け実施することとしました。

この取組については、林業関係者の関心も高く、静岡県・市町村職員をはじめ、地元林業事業体約270名の参加者がありました。

【現地デモンストレーション】

デモンストレーション会場となった瀬尻国有林は「日本三大人工美林」の一つである天竜美林として有名ですが、急峻な地形と脆弱な地盤を抱えていることから、作業路網の整備などには限界があり、伐採搬出等の経費削減ができない地域でもあります。

そこで、設定した主伐区域においてタワーヤードと自走式搬器を用いて集材を行い、材を降ろした後の搬器でコンテナ苗を山に運び入れ、植栽を行いました。

また、全木搬出に伴い発生した枝条の処理には、自走式の破砕機を用いて、チップの生産試験も実施しました。

架線系一貫作業の流れは次のとおりです。

- ①チェーンソーによる立木の伐採
- ②タワーヤード、オートチョーカー、自走式搬器による集材
- ③山へ戻る搬器によるコンテナ苗の運搬、植栽
- ④ハーベスタによる枝払・造材
- ⑤グラップルによる積込・巻立
- ⑥土場に集積された枝条を自走式破砕機によりチップ化



自走式搬器による苗木の運搬

また、架線の張替えや中間サポートを用いた搬出を行い、効率性や作業工程の比較、伐区全体の生産性の検証を行うこととしています。

この試験地域では、ニホンジカによる食害被害も発生し始めていることから、今回植栽した苗木には忌避剤を塗布するとともに、試験地周辺にセンサーカメラを設置しモニタリングを行いながら効率的なシカの個

体数管理を進めていくことにしています。

【低コスト造林技術向上のためのシンポジウム】

デモンストレーション終了後、地元文化会館において、シンポジウムを開催しました。

タワーヤードの詳細、コンテナ苗の現状や課題、シカ管理についての三つの基調講演に続き「再造林コストの低減に向けて」をテーマにパネルディスカッションを行いました。

会場からは「架線技術の継承が必要」「再造林にはシカ対策が必要」等の意見があり、人材育成やシカ対策、造林作業の低コスト化が国民共通の課題であることを確認しました。

今後とも、このような実証試験等を行い「現地で使える」低コスト化技術への取組を進めてまいります。



シンポジウムの模様

「低コスト作業システム推進のための 列状間伐現地検討会」を開催

森林整備部 資源活用課

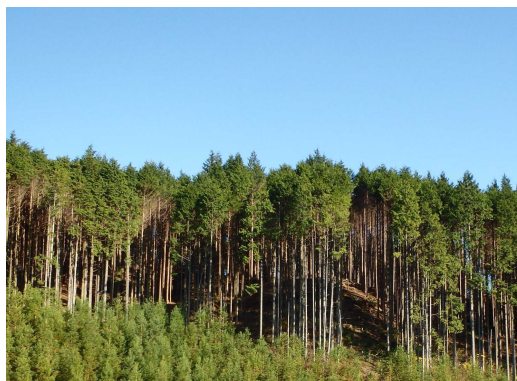
11月18日・19日に茨城森林管理署管内において周辺森林管理署及び関係請負事業者等の参加のもと「列状間伐現地検討会」を開催しました。

昨年度は、福島森林管理署白河支署管内において列状間伐を中心とした低コスト作業システムの普及・定着に向け検討会を実施したところですが、依然として列状間伐の実施率に、地域によって大きな差異が生じている状況にあることから、本年度は、列状間伐の実施率の高い茨城森

林管理署で列状間伐施業を実施した事業地について参加者全員で検証しました。

18日は、茨城県常陸太田市の国有林において、総勢90名(事業体関係者40名、局署職員50名)により施業形態の異なる2箇所を踏査しながらの意見交換を行ないました。

開会にあたり、寺川森林整備部長より「列状間伐を推進することにより、実効の伴う低コスト作業の推進及び林業労働安全の確保に期待する」旨の挨拶がされました。



上田代国有林
列状間伐現地検討会箇所



菊池総括森林整備官による
現地説明に聞き入る参加者



調査方法を説明する
徳田森林事務所小林森林官

また、施業を実際に実施した(有)佐川運送専務より、施業の特徴や効率等について説明があり、参加者からは「生産性がどのくらい向上したのか」「かかり木の発生の頻度はどうであったか」「次回の間伐の手法はどうするのか」等々の質問や意見が出され参加者間で列状間伐への理解を深め、情報の共有化が行われました。

19日は、茨城森林管理署会議室において、渡邊間伐推進担当企画官より、森林林業の現状を踏まえた高効率で低コストな作業システムを推進する観点からみた列状間伐の必要性についての説明があり、その後「列状間伐の実施率を高めるにはどうしたらよいか」という課題に対して、茨城署から収穫調査実施手法の紹介

があり、定性間伐が主体の参加署からも列状間伐の施業について質問や様々な意見が出されました。また「間伐効果」「風雪害の多い林地」及び「収穫調査手法」等についても活発な意見交換が行われました。

開会にあたり、岩井資源活用課長より「列状間伐は低コスト高効率な作業システムが導入できる間伐方法であるとともに、伐倒によるかかり木の発生が少なく、事業体の労働安全を図るうえでも有効と考える。事業の発注者として当検討会を通じ列状間伐を取り入れた事業がより多く発注されることに期待する」との挨拶があり、来年度に向けた取組を確認し終了しました。



意見交換の様様

赤谷の森から

「平成26年度 様々な！ふれあい活動について」

赤谷森林ふれあい推進センター（以下「赤谷センター」という）では、三者協定による赤谷プロジェクトを進めるための業務を行っていますが、赤谷プロジェクトの取組をわかりやすく伝えるために「ふれあい活動」についても数多く取り組んでいます。ふれあい活動にあたっては、参加者のニーズを収集しながら、「より安全に！より楽しく！より学べる！」提案型のプログラム作りに取り組んでいます。

今回は、主だった活動を紹介致します。

小中学校を対象とした森林環境教育

○地元の小中学校

地元の小学校から依頼を受け、毎年5、6年生を対象に、身近に生息している動植物や森林と人との関わりやなどを知ること目的にした遠足を実施しています。また、6年生は旧三国街道での遠足時にセンサーカメラの設置を体験し、事後学習で撮影した森の動物たちを題材に学んでいます。

・新治小5年（7月23日）、沼田北

小5年（10月2日）、新治小6年（10月8日、12月2日） 延べ参加者数207人

○千葉県の中学校

高原千葉村（みなかみ町相俣）に野外体験にきている中学2年生を対象に、自然保護・森林保全等を学ぶことを目的にした環境教育のプログラム（森の探検ウォークラリー・VESION3・4）を提供しています。

・おゆみ野中（6月27日）、蘇我中（9月16日）、打瀬中（10月23日） 延べ参加者数59人

○利根実業高等学校

グリーンライフ科森林科学コース2年生を対象に、自然環境や保護活動に対する知識を深め、今後の学習に役立てることを目的にした旧三国街道での自然・歴史探索を行う環境教育を実施しています。

（11月12日）参加者数20人



新治小学校遠足10/8

一般・大学等を対象とした研修

赤谷プロジェクトは、生物多様性の復元と持続的な地域づくりに関する先進的な取組であるとともに、国有林の協働管理のモデルでもあります。赤谷プロジェクトのこれまでの成果、協働管理のためノウハウ等について、大学生・社会人向けのセミナーにも積極的に協力しています。

・日本獣医生命科学大学猛禽サークル（5月7日）、放送大学面接授業（5月16、17日）新潟大学農学部生産環境科学科（6月22日）、群馬県農林大学校森林・環境コース（10月23日）、東京農工大学大学院農学府国際環境農学専攻（10月24日） 延べ参加者数145人



東京農工大学大学院10/24

官公庁研修講師等

○環境省自然保護官研修
環境省環境調査研修所からの依頼

を受け、自然環境行政の現場の最前線である自然保護官事務所勤務を既に経験した自然系技官の職員を対象に「林野行政に見る地域協働」赤谷プロジェクトを例に「というテーマで、赤谷プロジェクト三者で講義を行いました。（11月5日） 参加者数23人



環境省自然保護官研修11/5

○林野庁生物多様性保全研修

林野庁森林技術総合研修所の依頼を受け、地方公共団体及び森林管理局担当職員等を対象に、地域の自然的・社会的状況に応じた実効性のある生物多様性保全を図るため生物多様性保全に精通した技術者を育成することを目的にした研修の講師として赤谷プロジェクトの取組を紹介しました。（6月25日、11月17、21日） 延べ参加者数30人

CSR等企業へのプログラムの提供

○デサント・スポーツキッズinみなかみ町

みなかみ町まちづくり交流課の依頼により、みなかみ町まちづくり交流課と(株)デサントSP統合部キッズ事務局との共催により開催されている「デサントキッズスポーツ教室」に森林環境教育プログラム「森の探検ウォークラリー」を提供しました。(7月21日) 参加者数50人



デサントスポーツキッズ7/21

地域と連携した自然観察会の開催

○赤谷の森自然散策(年3回)

群馬、新潟の県境にある旧三国街道等において、赤谷センター・みなかみ町観光課の共催で、赤谷の森の自然や人とのつながりを学べる機会として、年3回「赤谷の森自然散策」を実施しております。今年度は、猿ヶ



深まる秋と紙芝居10/25

京温泉にある「民話と紙芝居の家」のコラボ企画として実施しています。第1回(5月24日)、第2回(10月25日)、第3回(平成27年2月11日予定) 延べ参加者数 71人

地域イベントへの参画

赤谷プロジェクトの目的である持続的な地域づくりの達成に向けて、プロジェクトの取組をわかりやすく伝える機会として、地域行事等へ積極的に参画しています。イベントブ

スでは、自然等に関心や親しみを持っていたためへの入口として、ネイチャークラフト等の体験コーナーを設けています。

・あかぎ南ろく桜フェスタ(4月12日) 体験者数56人
・敷島公園祭り(4月29日) 体験者数332人

・ホテルが生息する環境づくり体験教室(7月5日) 体験者数40人
・赤谷湖上花火大会(8月23日) 体験者数135人
・群馬県21世紀の森フェスティバル(8月24日) 体験者数88人



赤谷湖上花火大会8/25



マツのコデラックス! 11/24

を実施したところ、沼田市でも開催してほしいとの一般の方からの要望を受け、赤谷センターの自主企画として開催しました。(11月24日) 体験者数15人

○ロケットリーフの普及

地元NPOから相談を受け、平成24年度に大人も子供も気軽に楽しめる環境教育教材として、「空飛ぶタネの模型(名称…ロケットリーフ)」の開発に協力しました。これを活用し、森林文化を伝え、緑化運動や間伐材利用促進の啓蒙を通じて地域振興等にも寄与できる環境教育プログラムも同時に作成し、普及に努めています。

最後に

今年度の赤谷センターのふれあい業務には、延べ1457人(12月末現在)のご参加をいただきました。

今後も新たなニーズを掘り起こしながら、赤谷プロジェクトの取組を伝え、「知って、学んで、体験」できるプログラム等を作成・提供して行きます。

職員一同! 皆様のご参加をお待ち申し上げます。

その他

○ネイチャークラフト教室(マツのコデラックス豪華版!)
みなかみコイラ2014のプロ
グラム「マツのコデラックス豪華版!」

森づくり最前線

埼玉森林管理事務所 秩父森林事務所 首席森林官 川島光広

私が勤務する秩父森林事務所は、埼玉県秩父市に位置しています。秩父市と言えば例年日本三大曳山祭の「秩父夜祭」が12月3日に行われ、先月も多くのお客様で賑わいました。

管轄する国有林はその秩父市の一部と、平成25年4月からときがわ町、毛呂山町の国有林も管轄しています。秩父市内の国有林は、東京都最北端付近の西谷山と接する県都境付近にあり、首都圏の水源である荒川の源流域となっていることから、特に緑のダムとしての機能を重視した山作りを行っています。地質は我が国で最も古い「秩父古生層」で各種基岩や化石等も多く、地質研究の宝庫と言われていますが、東京都側から一歩秩父市側に入ると、急峻で森林というよりは崖という感じで、新緑



日本三大曳山祭「秩父夜祭」

や紅葉は素晴らしいですが、歩道等の修理が困難な状況となっている所が多く、事業が制約される現状となっています。



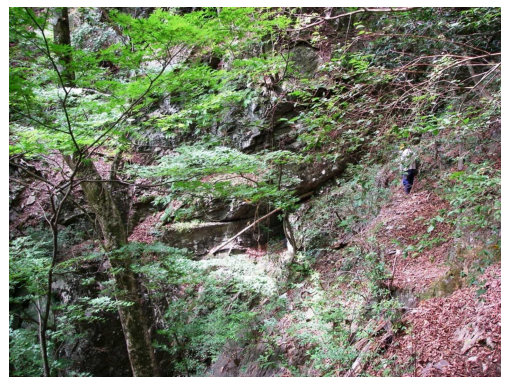
浦山国有林の新緑



浦山国有林の紅葉

また、近年シカやクマなどにより、スギやヒノキなどの皮剥ぎや食害などの被害が多く、これらの影響により木が枯れてしまい、表土の流失などが起き始めています。植えたばかりの時には周りを柵で囲ったり、1

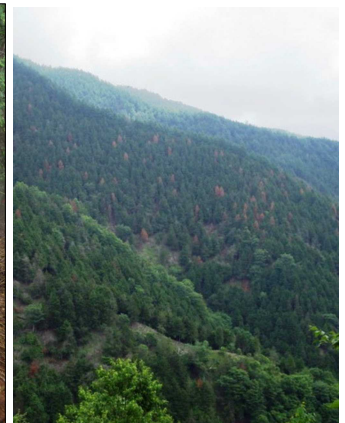
本1本に柵などをかぶせるなどしてありますが、昨年2月の観測史上最大の積雪により柵が倒されるなど、完全な対策はなく、コストもかかることから、試験等を行いながらより良い対策を行っているところです。



急峻な地形(中川国有林)



シカにより剥皮されたヒノキ



シカ被害の状況
(赤く見えるのが被害木)

また、成長した木についても、来年度より皮剥ぎ防止対策を行っていく予定となっています。

ときがわ町と毛呂山町の国有林については、神社仏閣や住宅に近い所も多いことから、境界の管理や倒木等の被害がないかなどの巡視を重点に行っており、市街地に近く比較的傾斜が緩い立地条件を生かし、「森と人の会」のボランティア等の活動や、なかなか森林にふれあう機会が少ない近くの小学生を対象に森林教室などを行っています。

趣の異なる国有林ですが、これからその特性を生かしながら、森づくりを行っていきいたいと考えています。



「森と人の会」と作業地の事前調査

管内のいちおしスポット



ちょうくろうさん
長九郎山

■ 伊豆森林管理署 <http://www.rinya.maff.go.jp/kanto/izu/index.html>
〒410-2401 静岡県伊豆市牧之郷546-5
TEL:0558-74-2522(代表) FAX:0558-72-5553

伊豆半島・天城山系の最南端に位置する長九郎山(995.7m)は、ブナを主体とする落葉広葉樹にモミ・ツガ等の針葉樹が混生する天然林で、伊豆半島のブナ林としては最も南に位置する植物分布上貴重な森です。

見晴らしのいい日であれば、天城連山のほか北側には富士山や南アルプス、南側には伊豆七島を望むことができます。

頂上までのルートは、交通手段によって異なります。

電車を利用してお越しの方は、松崎町池代から登るコースが一般的です。

お車でのお越しの方は、富貴野山宝蔵院まで車で行き、そこから遊歩道を登るコースがあります。

天城山系の主脈から分かれ南へ走る支脈の稜線地帯は「長九郎自然観察休養林」に指定されていて、5～6月のシャクナゲの時期には、多くの人々が訪れています。

なかでも、6月頃に白い可憐な花を咲かせるアマギアマチャは、その葉を噛んだときに感じるほのかな甘みが特徴で「天城」の地名の由来になったともいわれ、自然観察会でも印象に残りやすい植物です。

また、山頂付近を中心に約千本が自生しているアマギシャクナゲは、標高800m～1400mの温帯から冷温帯に自生する植物で、長九郎山は自生での南限とされています。

この植物は、尾根沿いの乾燥・日陰地に自生しているため、浅根が地面に非常に長く発達しているのが特徴で、踏み込みに弱いので、

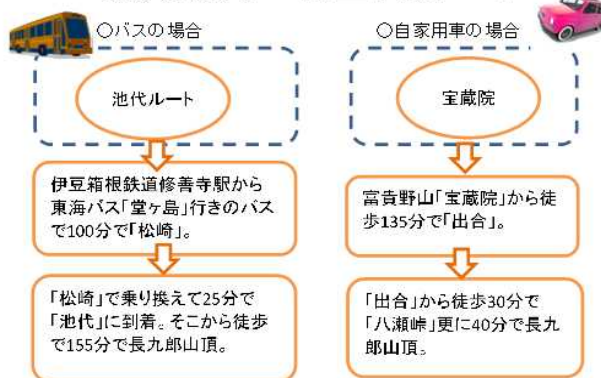
お越しの際は、登山道からはみ出さないようにして、先人から引き継いだ大切な自然を次世代に引き継いでいきましょう。

(伊豆森林管理署
広報広聴連絡官 澤井良一)

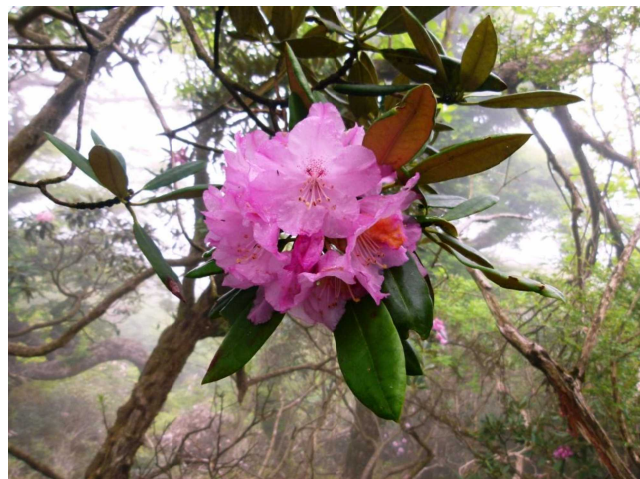


頂上の展望台から富士山を望む

長九郎山への登山ルート



編集発行所
F T 総
A E 関
X L 東
0 2 森
2 2 林
7 7 管
() 理
2 2 局
3 3 課
0 0
1 1
3 3
9 5
3 8



アマギシャクナゲ